

年鑑 ナイフマガジン 2018

Knife Magazine 2018

C o n t e n t s

Editor's Eye 002

STEVE RYAN REVIVES! 010

スティーブ・ライアン 再起動!

その最新作と新展開!

松田菊男 *KIKU KNIVES 2018* 024

SHOT SHOW in LAS VEGAS 036

世界のナイフ、最新トレンドをチェック!

日本のカスタムナイフショー 046

東京フォールディングナイフショー 2017
2017JCKM / JKG 鍛造部会合同カスタムナイフショー
銀座ブレイドショー 2017 夏
第38回 JKG ナイフショー
第33回 JKG ナイフコンテスト

古川四郎 フォールディングナイフ・コレクション 070

報道カメラマン・横田徹、ハンティングに耽る! 076

大工道具のかたち「引き継がれる道具と思い」 082

●土田昇/秋山実

【保存版】

ナイフと刃物のシャープニング & メンテナンス 113

HOW TO SHARPEN & MAINTAIN KNIVES

注目の米新進ナイフ工房

BROUS BLADES ブラウス・ブレイド 146

カスタムナイフメーカー

斉藤 博 *HIROSHI SAITOH* 154

はたらく刃物 グリーンウッドワークス 168

●かくまつとむ/大橋弘

第50回 関刃物まつり & 関アウトドアズナイフショー 2017 162

【速報】銀座ブレイドショー 2018 冬 164

【速報】東京フォールディングナイフショー 2018 166

ハンターとハンティングナイフ 074 インフォメーション 110 おくづけ 176

●中條高明

STEVE RYAN REVIVES!

スティーヴ・ライアン復活!

文・写真：ヒロ・ソガ TEXT・PHOTOS:HIRO SOGA

●商品問い合わせ：山下刃物店
TEL 079-222-1109
<http://yamashita.ocnk.net/>

スティーヴ・ライアン。
約20年前、登場するやいなや
一世を風靡したカスタムナイフメイカーだ。
独創性に溢れるデザイン、
経験に裏打ちされた自在な工作テクニック。
そんな彼が、新たな工房をオープンした。
続々繰り出される作品に注目したい。



モンスーン G 全長306mm、ブレイド長180mm、ブレイド材SPG-2積層鋼(SPG-2をステンレスとニッケルで挟んだ鋼材)、ハンドル材グリーンキャンバスマイカルタ、価格78,000円。
Monsoon G 強度が求められるブレイド先端部分がハマグリ刃、後ろ半分が使い易い薄刃仕様になる。削り名人キクさんならではの1本。

**ポリスユーティリティ
 ラージ(右) & コンパクト(左)**

Police Utility Large & Compact

ラージ：全長270mm、ブレイド長145mm、価格63,000円。
 コンパクト：全長233mm、ブレイド長105mm、価格59,000円。ともにブレイド材0U-31、ハンドル材ブラックキャンバスマイカルタ。

世界で人気の菊ナイフ。多様なモデルの中でロングセラー2トップが「ハシナウカムイ」と写真の「ポリスユーティリティ」だ。「仕事用に「菊ナイフ」が欲しい……」というある公務員の希望から、筆者がデザインに関与させてもらったもの。振って十分なパワーが得られ、それでいて携帯しやすいサイズ。試作を重ね、ダブル指かけでトルクがかけやすいグリップ、そして、分厚くて頑強ながら鋭い切れ味など、実用性を兼ね備えたナイフが完成。削り名人キクさんのハマグリ刃ならではの高性能が魅力。

●商品問い合わせ：山下刃物店
 TEL 079-222-1109
<http://yamashita.ocnk.net/>

●文・写真：長谷川朋之
 Text & Photos: Tomo HASEGAWA

【KIKU ナイフ 2018】

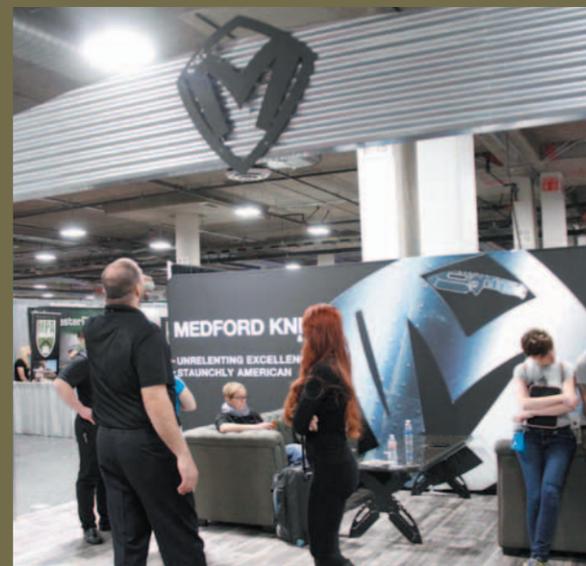
KIKU KNIVES 2018

～松田菊男、その最新作と新展開～

世界的人気を誇る和製カスタムナイフ
 新製品と US でのフィールドテストの 2 本立てで
 その新展開をご紹介します！



特長、特大、小型モデル、S字、ハマグリ、ストレート……。高度な技術でどんな削りもOK！何でも美しいナイフ作品に仕上げられる。それが「キクさん」こと松田菊男さんだ！



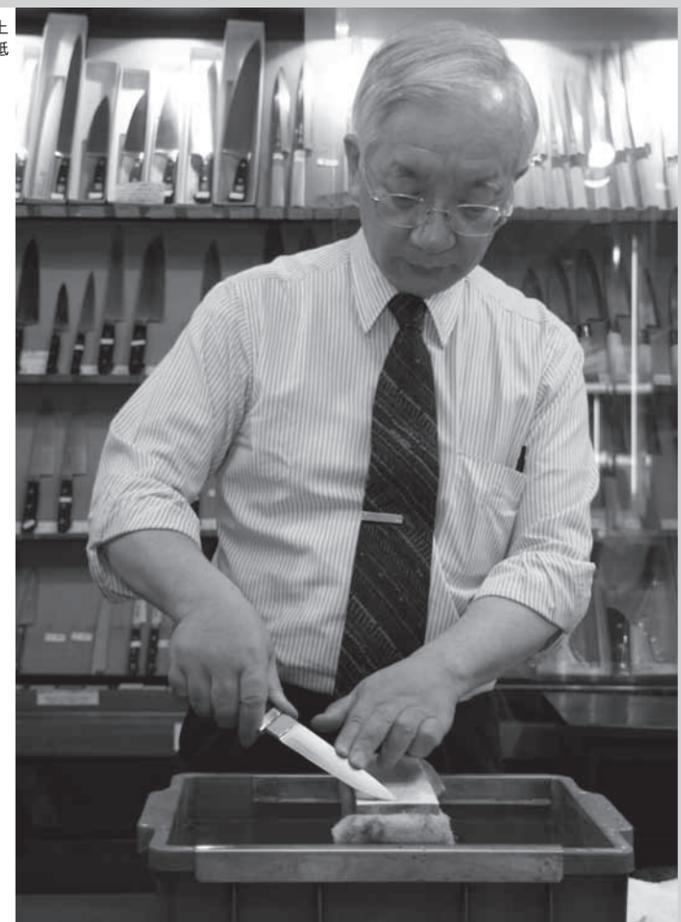
SHOT SHOW 2018 In Las Vegas

●文・写真：鮫島宗貴
Text & Photos: Muneki Samejima

世界最大級のミリタリー見本市、ショットショー。
今年も1月に米ラスベガスで開催され、
世界中からの来場者でにぎわった。
今回もファクトリーを中心に、注目のナイフの数々を
ダイジェストでご紹介しよう！

今年も世界最大規模のミリタリー・トレード・ショーであるショット・ショーがやってきた。いつもなら先輩ライター達の後について銃器メーカーを中心にショーの様子を伝えることが多かった筆者(鮫島宗貴)だが、今年は何と編集部から各ナイフ・メーカーの取材も依頼されました。コンパティブシューター(競技射撃)を生業にしている筆者は、正直、ナイフ関係には先輩ほど明るくない。少し不安だったが、会場で実物を目にしたらアドレナリンが全開に！

会場中を駆け回って各メーカーの新製品を中心に気になるモデルの写真を撮ってきた。世界最先端のナイフのトレンドを楽しんで頂ければ幸いです！



総合刃物ショップの老舗「銀座菊秀」の店主、井上武さん。シャープニングの技術、天然、人造の砥石に関して豊富な経験と深い知識を持っている。

ナイフの研ぎ直し

研ぎ角や砥石と鋼材の相性など、突き詰めればどこまでも深く、いろいろな疑問が出てくるシャープニング。一般には難しいという印象も、そんなところから出てくるようだが、特殊な刃に研ぎ上げなければならぬ場合を除けば、高度な技術や複雑な理論は必要ない。大切なのは、研いでみようとする気持ちと、基本的な知識だけ。銀座菊秀の店主、井上武さんに、その第一歩を踏み出すための要点を伺ってみた。

の上で、合成の砥石も、性能の良いものが作られるようになっていきます。最近、ヨーロッパでは和包丁がブームになっていますが、包丁といっしょに、日本の砥石も輸出されていて、とても人気があるんですよ。

大量にナイフを作るマスプロのナイフメーカーや、何本かのナイフをまとめて作るカスタム・ナイフメーカーは、グラインダーやベルトグラインダーなどでエッジを付けますね。マスプロナイフは最後にバフで磨いて仕上げますが、カスタムナイフなどは、最終段階で砥石を使う。砥石は、シャープニングに不可欠な道具だし、一般のユーザーは砥石を使うしかない。一番使いやすい、しかもナイフにも包丁にも合っている道具なので、まず砥石を知り、それを適切に使う知識を身につけることが大切だと思います。

砥石には、水砥石とオイルストーンがあり、それぞれに天然の砥石と合成の砥石があります。ナイフは海外から入ってきた道具なので、海外から輸入されるオイルストーンを使うのが常識だと思っっているユーザーが多いと思いますが、決してそんなことはありません。むしろ、最近多くなってきた熱処理高度が高いスレンレス鋼をブレード材にしたナイフは、オイルストーンでは研ぎにくい場合があるんですよ。

炭素鋼を素材にしたブレードでも、ステンレス鋼のブレードでも、一番研ぎやすいのは、合成の水砥石だと思います。



合成砥石は、製法、素材などによって種類も価格も様々だ。



ナイフはもちろん、包丁などの刃物を研ぐ場合も、合成砥石が最も使いやすいという。



砥石はしっかりと固定して使うもの。固定用具や水の使い勝手を自分なりに工夫しよう。

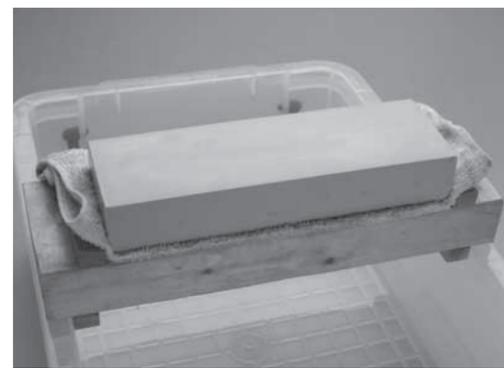
研ぎ角を割り出す

ナイフのエッジは、最初に付けられているエッジ角に研ぐのが基本。砥石にエッジを当てる、極端な鈍角からナイフを少しずつ寝かせて行ってみよう。砥石の研削面とエッジベベルがぴったり一致すると、ナイフが安定する。それが手に伝わってくるのはほんの一瞬なので、見逃さないよう慎重に。

オイルストーンを使う場合は、ナイフをエッジ方向に軽くスライドさせてみる。鈍角すぎるとオイルが前に押され、鋭角すぎるとオイルがブレードの下に入り込んでいく。研削面に垂らしたオイルがブレードに乗り上がってくる角度。それがおおよその研ぎ角になる。



砥石をしっかりと固定でき、しかも容器に溜めた水がいつでも使える。砥石を正しくつかうための工夫、使いやすくするための工夫が、上手なシャープニングの第一歩だ。



木材を利用して自作した砥石台と市販の樹脂製容器。この組み合わせで、水砥石が格段に使いやすくなる。



砥石の研削面にエッジベベルを当て、エッジ方向にズラした時、水やオイルがブレード・ベベルに上がった角度が、エッジ角の基本だ。

日本には水が豊富にあるし、水を使っただけで、磨いた後の始末も簡単です。プロの職人さんが使う刃物は、最後に天然砥石で研ぎ上げますが、荒砥、中砥くらいまでは合成を使っていることが多いんですよ。

合成の砥石を生産するメーカーはいろいろあり、その作り方や原料の違いなどで、非常に多くの種類が市販されています。それぞれに特徴がありますが、ナイフを研ぐための砥石ならば、ある程度の固さが必要。圧力成型された組織の細かな砥石を選ぶのが適切ですね。圧力成型された砥石は、組織も細かくなっているため、品質的にも優れています。それなり価格になってしましますが、ユーザーがナイフを研ぐだけならば、10年くらいは使うことができる。安価な砥石を何個も買い換えるより、品質の良い砥石を1個、長く使い込むほうが賢いと思います。

基本的な研ぎ方が身につくまでは、いろいろなナイフ、いろいろな刃物を研がない方がいいでしょう。安価なナイフを1本購入して、それを研いだり使ったりしながら、エッジが平均した切れ味に研がれているか、エッジの角度が適切になっているかなどを常に考えてみる。それを繰り返して行くことで、自分が良く切れると感じるエッジ、そのエッジに研ぐための研ぎ角などが身についていくのではないのでしょうか。

手が決まらなければ刃物は研げない。そんな表現を時々耳にするが、手が決まる、という状態は理論ではない。エッジを砥石の研削面に付けたとき、体が自然に研ぎ角を見つけ、腕や肘、手首が均一なエッジになるようにナイフを動かすということだ。結論は、良い合成砥石を1本安価なナイフとセットで購入し、何回も研いで切れ味と研ぎ方を身につけていく。頭で考えるよりも体を使うこと。それがシャープニング・テクニクを身につける近道だ。

日本各地で採掘される天然の砥石は、炭素鋼で作られたナイフや刃物によく合うが、天然の物であるため近年では産出量が激減している。



【仕事の数だけ道具がある】文…かくまつとむ 写真…大橋弘

はたららく刃物

グリーンウッドワーク

木は乾燥させるほど落ち着き、曲がりや歪みのない製品に加工できる…。そんな木工の常識を覆すカウンターカルチャーが、木が軟らかな生のうちに刃物で削るグリーンウッドワークだ。近年、世界的に再評価されているライフスタイルとしての木工。日本における先駆者のひとりが福島県でクラフトハウスという工房を営む井丸富夫さんである。

あえて生木を使う理由

建築にしてもクラフトにしても、現代木工は電動工具なしに成り立たない。そう言うところ「いや、日本の伝統建築や家具作りの現場では、まだまだ鋸や鑿、鉋が頑張っているよ」という声があるかもしれない。

では、材料が職人の元へ届くまでの道筋はどうだろう。山から製材所へ降るされた原木は、高速で回転するバンドソーや丸鋸であつという間に切れ、乾燥にかけられる。

今の時代、一般的な家の普請や家具材に、木挽きが大鋸でひとつずつ挽いた材が使われることはない。ほぼすべての材は、けたたましい産声をあげながら連続的に誕生する。

用途別の直方体にかようにも切り分けられるのは、電気のパワーがあればこそ。素材があらかた必要な寸法になっているので、手鋸や鉋で大仕事に立ち向かわなくてよい。

現代木工を批判しているわけではない。むしろ私は理解者だ。機械力に助けられた木工品の利点はふたつある。ひとつはよく乾燥して伸縮の

止まった直方材が使えるので、コンマ・ミリ単位の精密な加工ができることだ。つまりシャープで美しい表現ができる。もうひとつはコストダウンである。製材段階から時間を短縮できることで量産が可能になり、精度の高い製品を手ごろな値段で提供できるようになった。

機械動力以後の木工は消費者の納得する相場に収まってきたはずだが、無垢材を使った建築や製品は、往々にして値が高いと思われがちだ。「木という存在が、無機質な均一な素材のひとつとしか見られなくなってきたからではないですか。今はプラスチックや合板、金属、コンクリートと等価値になっている気がします。」

斧で割ってみるとわかりますが、木の内部というのは、繊維にうねりがあったり、独特の模様があつて面白いですよ。同じ樹種でも育った地域で色や香りも違う。同じ内面性を持った木はふたつとありません。

自然が生み出した味。加工することの面白さ。これが木の絶対的な価値です。この大事なところを世の中に再発信するのがグリーンウッドワークかな、と思っています」

2011年から福島県古殿町の旧保育所で木工教室を開いている井丸富夫さん(64歳)は、薪ストーブの横



井丸さん手製のカービングナイフ。白紙材の鋼に新幹線のレール鋼などを積層させた地鉄を鍛接。木のハンドルやさやももちろん自作だ。販売もしている。



足踏み轆轤の削り屑。回転力もトルクも弱いので薄く細く少しずつ削る。生の木ならではのしっとりとした屑が出る。